

「多様性と対立性」を有する空間の設計手法に関する研究

—S. ラディックの作品分析をとおして—

環境科学専攻 森田研究室 大原翠美玲

1. はじめに

1.1. 背景と目的

ポストモダニズム建築の先導者である R. ヴェンチューリは近代建築運動の純粋主義を批判し、著書をとおして建築における「多様性と対立性」を重要視する視点をもたらした¹⁾。この考えは後の「矛盾」「曖昧さ」「複雑さ」など排除されてきた価値観の見直しやその回復といった試みに影響を与えた。

京都市は歴史都市として古くから景観政策に取り組み、美しい街並みの保護・継承を行ってきた。特に京町家が作る街並みは国内外の観光客にも人気であり、単なる歴史的遺産ではなく、京都のイメージそのものとなっている。しかし、「多様性と対立性」の視点で見ると、現代の京都の街並みはヴェンチューリのいう「安易な統一」といえるのではないだろうか。京町家をモチーフとした現代的な用途の建築は数多く設計されているが、固定されたイメージに沿った材料や構造、色の制限があり現代の京都における地域性の表現方法は乏しい。「安易な統一」による京都のイメージが定着することで、新たな表現が否定され京都における設計の発展が制限される恐れがある。京都の建築はもっと多様な表現を許容しつつ、街並みや歴史を継承する手法を探る必要があると考える。

こうした問題に取り組むにあたり、本研究では現代チリを代表する建築家である S. ラディックに注目する。ラディックは、個人でチリに関する書物を収集・保存する活動を行い、チリのモチーフを使用した作品を多く設計している。ラディックの作品は多くの建築の専門家から多様なイメージを想起させると評価されている^{2,3)}ことから「多様性と対立性」を生み出すことに成功していえる現代建築科のうちの一人であると考えられる。

本研究では、ラディックの作品分析をとおしてラディックの設計手法を明らかにし、その手法を用いた京都における建築空間の設計を試みる。「多様性と対立性」を有する設計手法を提示し、「安易な統一」に陥らない地域性の表現の可能性を広げることを目的とする。

1.2. 既往研究

建築空間に「多様性と対立性」を生み出す試みは一般にポストモダン建築と呼ばれる。ヴェンチューリの著書『多様性と対立性』では、L. コルビュジエのサヴォア邸や、A. アルトのイマトラの教会などが事例として取り上げられている¹⁾。また、方法論としては C. アレグザンダーがセミラティス構造の空間の設計の方法として示した「パターン・ランゲージ」などがある。ラディックに関する研究

は、V. ホベルグの芸術的知識の建築における可能性に関する研究⁴⁾、C. プラティのチリの現代建築の特徴を考察した研究⁵⁾などがあるが、本研究は、「多様性と対立性」を生み出す方法をラディックの作品分析を通して提示しようとする点に特色がある。

1.3. 研究の方法

S. ラディックの作品における「多様性と対立性」を生み出す手法を分析するにあたり、G. ゼンパーの「建築の4要素」という視点を参照する。分析対象は『El Croquis 167: Smiljan Radic 2003-2013』⁶⁾『El Croquis 199: Smiljan Radic 2013-2019』⁷⁾に掲載された作品のうち、建物全体の平面図および断面図(一部立面図)があり、主要部分の材料が概ね判明している、あるいは写真等から推測可能である 29 作品とする。

分析を踏まえ、ラディックの設計手法と用いて、京都における町家をモチーフとした建築の設計を行う。

2. 作品分析

「多様性と対立性」を生み出すために、建築の構成要素が①材料・形・機能 ②組み合わせた部分 ③全体・空間 ④変形 の 4 段階で進化するプロセスを考える。各段階で構成要素は固有のイメージを持つが、プロセスが進むごとにイメージが追加・変更される。

「建築の4要素」から時代の変化を考慮して、筆者は新たに「建築の4要素の現代的解釈」を作成した。G. ゼンパーの「原材料」の項目は現代において同様の役割を担う「材料」に、「原技術」の項目はその技術が生み出す「形」に、「原要素」の項目はその要素が満たす「機能」に置き換えたものである。同一の色、アルファベットで示されたものは古代から関連を持つ。

材料	—	形	—	機能
A : 炉	—	筒	—	中心機能
B : 屋根	—	線	—	建物・空間を覆う
C : 囲い	—	薄い面	—	建物・空間を囲む
D : 土台	—	厚い面	—	建物・空間を支える
C' ガラス	—			
D' コンクリート	—			
D' 岩	—			

図 1 「建築の4要素」の現代的解釈

プロセス①では「建築の4要素の現代的解釈」で挙げた材料・形・機能がそれぞれ単体で持つ効果に注目する。プロセス②、③では「建築の4要素の現代的解釈」における

材料・形・機能をどのように組み合わせて部分および全体・空間を作るかを考える。(材料が金属、形が線形、機能が「囲む」の場合、その組み合わせをABCと表記する。)
④では仕上げ、色、スケールなどを調整する。

まずラディックの作品を①～④のプロセスに沿って分析することでラディックの手法を探り、次に①～④のプロセスをたどって設計を行う。

2.1 プロセス② 組み合わせた部分の分析

まず、「材料」「形」「機能」の分布を確認するために、ラディックの作品の断面図(一部立面図)の各部分を「建築の4要素」に当てはめ着色した。着色の結果、「材料」「形」「機能」の分布が一致しないものが多く、ラディックは材料・形・機能を多様な組み合わせで使用していることが分かった。ゼンパーは時代が進むごとに「建築の4要素」の組み合わせが多様化すると述べており、この結果からラディックの作品の現代性を読み取ることができる。

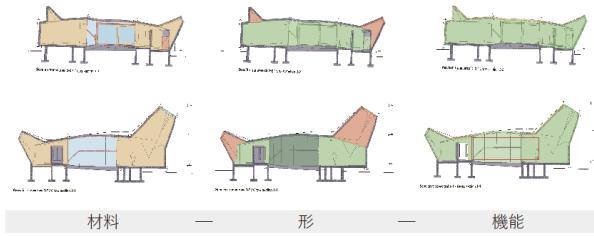


図2 「建築の4要素」の現代的解釈による塗分け例

次に、各作品にみられる組み合わせを集計しラディックの作品において多く用いられる組み合わせを分析した。結果から、ラディックの作品はチリの地域性の表現が多用されると考えられる。チリのブルータリズムに影響を受けた力強い表現(DDD, DDC, DDB)や、サーカスのテントを

模したもの(ABB, CCBの併用)である^{5,6,7)}。またOCB、OCC、OCDの割合が高い要因として、仕上げ材が多くの作品で用いられたことが考えられる。ラディックの作品は粗雑なイメージを与えるが、特に建物内においては丁寧な仕上げがみられ、建物内外で対比させる効果を狙っていると考えられる。

2.2 プロセス③ 全体・空間の分析

全体を構成する手法を探るために、平面分析を行った。中でも中庭を中心配置しその周りを移動する「中庭型」や、その発展形である「中庭型’’は、中庭を配置するチリの伝統に影響を受けていると考えられる。その他移動の仕方に特徴を持った平面形が多くみられた。

2.3 イメージ分析

本節では各プロセスで連想されるイメージを分析することで、多様なイメージを含むラディックの手法を明らかにする。本研究で用いるイメージは、ラディック自身の作品解説や他者がラディックを語る際に使用したキーワードとする。まず、プロセスを経た後の完成形としてのイメージを分析する。イメージ分析は、キーワード抽出に用いた文献と作品の写真を用いて行う。次に、プロセス①材料・形・機能 が単体で持つイメージを分析する。

2.4 ラディックの設計手法の考察とまとめ

最後に、プロセス②～④をたどり、各プロセスで用いられた手法と付加されたイメージの関連を分析した。

以上の分析から、ラディックの手法とイメージの関連は以下の図に示される。

3. 京都における建築設計への応用

以上の分析を踏まえ、プロセス①～④をたどりながら、多様性と対立性を有する建築を設計する。本研究では敷

「建築の4要素」の組み合わせ方と変形によるイメージ

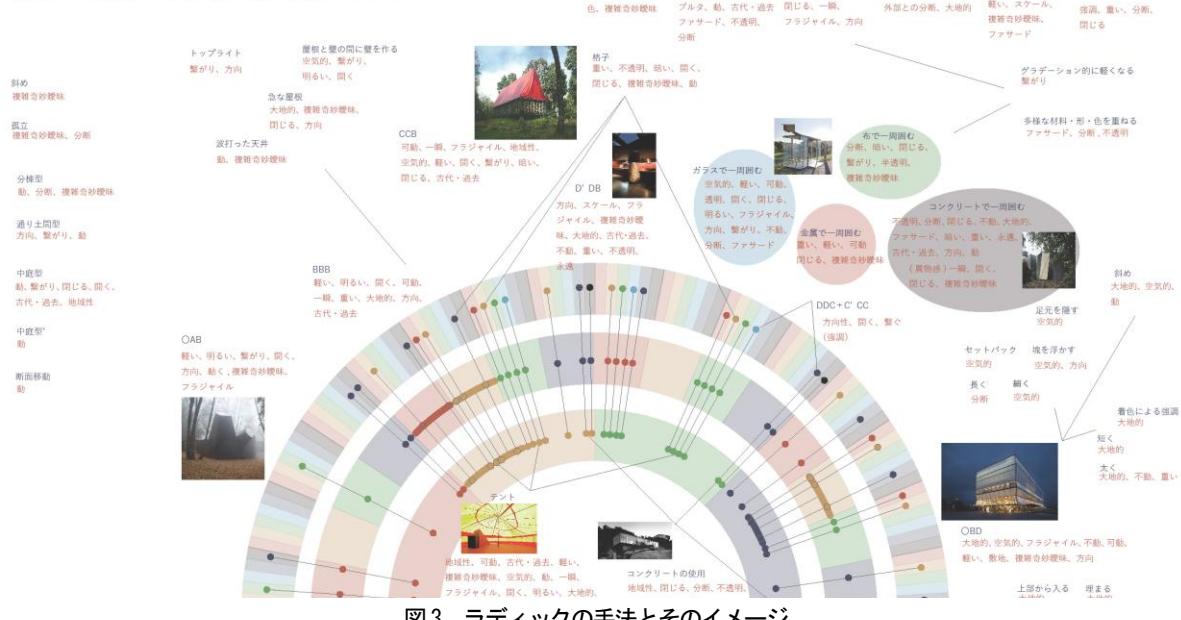


図3 ラディックの手法とそのイメージ

地を京都市某所という設定のもと、京都の典型的なイメージとして使用される町屋のボリュームを用いて、ラディックの方法論を発展させ現代的な都市施設の設計案を作成する。まず、プロセス①②に従い「建築の4要素」材料・形・機能の組み合わせのパターンを抽出する。このとき、「京町屋」のボリュームの変形のパターンも洗い出す。次に、プロセス②の一覧表から数個選び、プロセス③として空間として検討するスタディ模型を作成した。この模型を軸とし、設計プロセスを繰り返すことで設計を進める。

4. 設計案

4.1 ホテル

町屋を高層化することを考えた案である。町屋ホテルは近年の建築の町家化の中でも数多くみられる建築様式であるが、格子をファサードにあしらって面した棟を切妻平入にすることで京都らしさを演出するというやり方にとどまっているように見える。

【プロセス① 材料・形・機能/② 組み合わせた部分】 ホテルの非日常性と関連付け、「複雑奇妙曖昧」というキーワードから3つのパターンを抽出し、町屋を高さ方向に伸ばしたボリュームに当てはめる。格子により密度が上がった空間は複雑であり、コンクリートで囲まれた暗い空間は居場所を曖昧にし、筒は存在自体が奇妙である。

【地域性との関連】 町屋の軸組と格子をスケールの異なる2つの格子に置き換える。これらを構造兼ファサードとして機能させるため、建物全体は透明なガラスで囲む。また、建物全体を貫く空間である通り土間のメタファーとして筒の階段室を配置する。

【プロセス③ 全体・空間】 1階はコンクリートで囲まれた倉庫とギャラリー、2~5階は客室とし、筒と格子による壁のない客室を作る。筒が地面から生えてから天井に消えていくまでの間、筒は客室の壁として機能する。筒がない場合、格子が隣の客室との距離をとる。細い格子のブロックは1つであれば手が届き、2つ連ねると手が届かない距離となる。客室の間に2つ以上の格子のグリッドを

配置することで触れられない距離感を確保する。壁がないことで隣の客室の雰囲気が共有されるが、部屋割は奥行方向に長く方向性を持たせることで、隣の客室への視線が向くにくい平面とした。格子の配置により、大きな構造の格子のグリッドとそれが生じ、部屋割りが一見曖昧に見える。格子は家具や間仕切り壁として機能するだけでなく、胴縁などの構造としても機能し水回りを囲む際に用いられる。格子に宿泊客の荷物を置いていくことで特有のモザイクができる、お互いの雰囲気を共有しながら距離を測る。

【プロセス④ 変形】 筒のスケールを大きな構造の格子のグリッドからはずすることでアンバランスさによる奇妙さを加える。また、着色により奇妙さを演出すると同時に、複雑な客室に秩序をもたらす。

以上のプロセスを経て、ホテルは大地的であり空気的、古代的であり現代的といった相反するイメージを抱かせ、複雑奇妙曖昧な地域性を表現することができる。

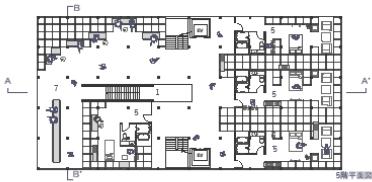


図4 5階平面図

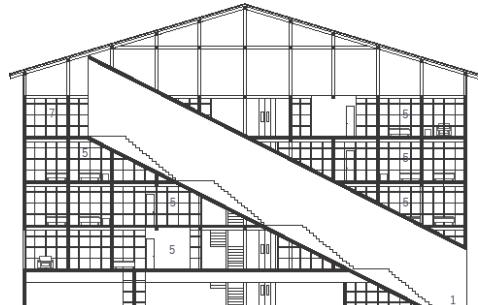


図5 長手方向断面図

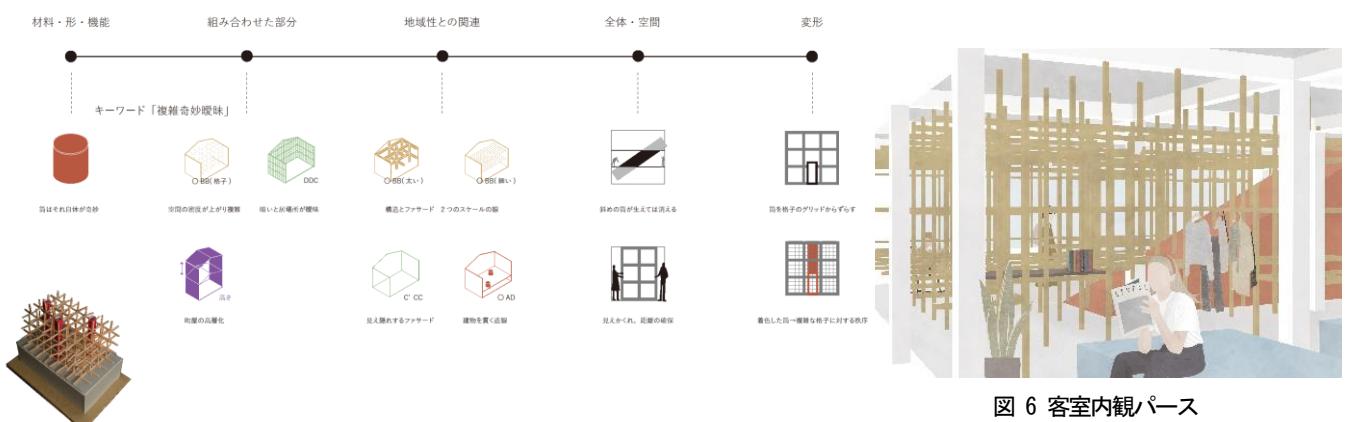


図6 客室内観パース

図4 ホテル 生成ダイアグラム

4.2 劇場

京都に古くから残る劇場として能楽堂がある。これはもともと屋外にあった能舞台を保存するために建物の中に入れたことが起源とされている。芸能は京都にとって保護の対象であり、建築はシェルターとして今後も発展する必要があると考える。本研究では京町屋をモチーフとした市民ホール程度の大きさを想定し設計する。

【プロセス② 組み合わせた部分】ホールの厚いコンクリートの防音壁に対し、比較的薄い壁を細かく配置することを考え、形が類似した3つのパターンを選んだ。

【地域性との関連】壁を壁柱に分割し襖のメタファーとする。奥の大ホールの静かさとエントランスの賑わいを町屋の公私の二面性に結び付け、歩かせることで連続的に変化する空間性を体験させる。

【プロセス③ 全体・空間】1階に大ホール、2階に小ホールを配置し、2~4階の展示空間とアトリエ、3~4階の図書スペース、5階のフリースペースはホールを取り囲み、上っていくように設計した。2棟の町家がつながったような勾配屋根により高さ方向に変化がうまれる。筒が浮いたり、方向転換したりしながら建物を貫通する。

【プロセス④ 変形】1~2階は大空間とホールの構成が続き単調になることを避けるため、中央部分の柱を壁柱から角柱に変更した。

以上のプロセスを経て、劇場は静かな移動を楽しみながら、筒や柱、屋根の変化などによる空間の変化を楽しむことができる空間となった。

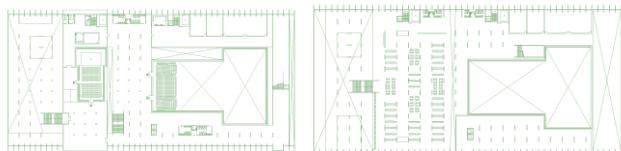


図7 2・4階平面図

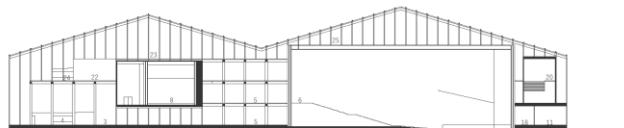


図8 長手方向断面図

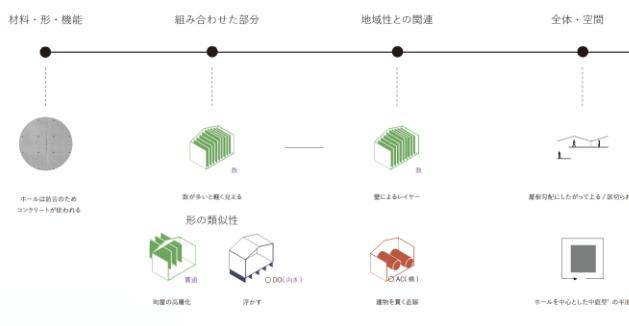


図9 劇場 生成ダイアグラム

5. まとめ

本研究では、S. ラディックの作品分析をとおして「多様性と対立性」を有する空間の設計手法を示し、手法を用いて京都を敷地とする建築の設計を行った。本研究にて行った手順は①「建築の4要素」による作品分析 ②作品のイメージと手法の関連性の分析 ③材料・形・機能の組み合わせのパターン出し ④設計案の提示である。

本設計において、ラディックの手法を参考に、プロセスをたどって設計することで、「安易な統一」に陥らない多様な京都のイメージを創出する設計手法の一端を示せたと考える。具体的には、①「建築の4要素」から案を構想することで、ステレオタイプな地域性の表現が適用しやすくなり、②部分から全体を考えることで、接続の際のつじつま合わせが生じることによる、固定概念を超えた発想を促す効果が得られた。今後の課題としては、ホテルや劇場以外での都市施設における応用可能性についても、検討する必要がある。

参考文献

- 1) R. ヴェンチューリ. 伊藤公文訳. 建築の多様性と対立性. 鹿島出版会. 1982. 12. 256p
- 2) a+u 2021年8月号. 新建築社 2021. 192p
- 3) スミルハン・ラディック. スミルハン・ラディック 寓話集. TOTO出版. 2016. 312p
- 4) Horberg Valerie. Uncoming: Artistic Knowledge in Architecture. Tacit Knowledge in Architecture - Conference Proceedings 2023. 2023. Pp1-7
- 5) Carlo Prati. Architettura Cilena contemporanea. L' INDUSTRIA DELLE COSTRUZIONI. 2012. pp. 4-16
- 6) El Croquis 167 : Smiljan Radic 2003-2013. El Croquis. 2013. 300p
- 7) El Croquis 199 : Smiljan Radic 2013-2019. El Croquis. 2019. 428p
- 8) Gottfried Semper. 河田智成訳. ゼンパーからフィードラーへ. 中央公論美術出版. 2016. P51-96

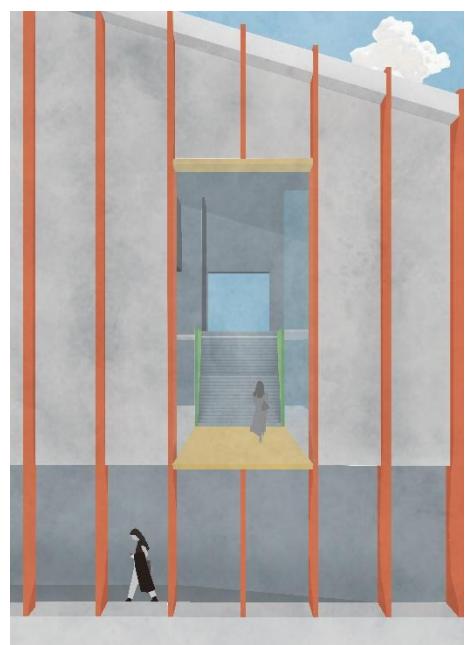


図11 パース